

ポジティブ思考と虚血性心疾患の5年生存率の関係には運動が介在

虚血性心疾患の患者において、ポジティブ思考が病気の予後の改善に関係するといわれているが、そのメカニズムは未解明のままである。この研究では、虚血性心疾患の患者のポジティブ思考が心臓病による初回入院までの期間や死亡率に影響するか、またこの関係に運動が介在するのかを検討した。

デンマークの虚血性心疾患患者 607 人を対象に、2005 年にポジティブ思考を評価する質問票および運動についてその目的を問う質問票を回答させた。死亡や入院については、2006 年から 2010 年のデンマークの国民登録からデータを集めた。

ポジティブ思考と心臓病による入院には有意な関連性はなかった。ポジティブ思考の強かった患者では、死亡率が有意に低下し（危険率 0.58）、運動している傾向が強かった（オッズ比 1.48）。ポジティブ思考やそのほかの関連する変数を補正したところ、運動を欠かさない人は死に至らない傾向がみられた（危険率 0.50）。

したがって、ポジティブ思考の強い患者は運動をする傾向があり、5 年間の追跡期間中に死亡するリスクが低く、運動がポジティブ思考と死亡率の関連性に介在していた。

出典：Circulation Cardiovascular Quality and Outcomes. 2013; 6: 559-566